

私たちが創った女子校

女子校が、次々に姿を消す時流にあって、

女子校を開校した学校の志をたたえたい。

現在の学校教育を語るために不可欠な学校です。

女子校がまばらな多摩地区にあって新しい核。

これからも、

女子たちをリードしつづけてほしい。

ムーヴの願いです。

少数精鋭たちがあたたかく集う白梅学園清修中高一貫部。

2011年、開校6年目。

吹き抜ける校舎内に6学年の清修の「姉妹」たちを見渡します。

開校時は1学年のみ。

6年後が楽しみでした。

生徒、先生、保護者が力を合わせて、

新しい女子校「清修」を創り上げました。

今…、

当時、思い描いたとおりの和やかな活力に満ちています。

オリジナリティに満ちた先鋭的な教育スタイルが、

スポットライトを浴びつづけました。

しかしながら、

清修の礎はシステムではなく、

常に生徒たちを見守る先生たち。

そのスピリットとチームワークは、

学校を訪ればすぐに体感できるほど。

校務センター（職員室）は生徒たちが集う「アトリウム」に

向かってオープンでフリーアクセス。

先生の周りに輪が囲みます。

真剣な表情で向き合います。

人間味にあふれる舞台に立ち、

師弟がコミュニケーションを交わしながら成長する。

学校の理想が密に凝縮しています。

●これが清修を選ぶ理由

記者は、彼女たちの中学校一年生の入学時を思い起こします。あどけなく駆け回っていた彼女たち。今、落ち着いた女性に育ちました。彼女たちはどのような学園生活に支えられたのでしょうか。そのハイライトをたどってみましょう。

ムーヴが期待する、清修オリジナリティ

■清修の礎 「All In One」

成長期の課題はたくさん。教科学習はもちろん、コミュニケーション能力・自己教育力・社会マナーやルール・他者への真心も養ってこそ学校です。現在、各私立学校は多彩なテーマを掲げ生徒たちを導いています。

しかしながら、課外にテーマ別のプログラムを継ぎ足すばかりでは、生徒たちも疲れてしまいます。全体の調和も崩れてしまいます。

授業空間に全課題を凝縮すればよいではないか！「All In One」の理念。これが清修の教育設計を支える根幹です。教科指導・進路指導・生活指導すべてを包括します。学校の中心である授業空間を教育テーマで満たします。ディスカッションやプレゼンテーションなど多彩な手法を有機的につなぎます。毎時間の授業で教科知識以外の素養や姿勢も、じっくりと築き上げます。

■自ら学ぶ清修生たち

たとえ、優れた授業であっても、座っているだけでは無意味。学びの主役は生徒たちです。自らが学び取る意志が欠ければ、いつか倒れてしまいます。

校舎の1階は吹き抜ける「アトリウム」。テーブルが並びます。各階の廊下は長いカウンターテーブルが貫いています。個別ブース形態の学習室も整います。放課後や休み時間には、生徒たちが思い思いに学んでいます。中学生たちは授業の反復でしょうか。高校生たちは過去問のチャレンジでしょうか。生徒たちの中には先生の姿。時に隣に寄り添いノートに書き込んでいます。時に肩をたたき一言激励の言葉を投げかけます。

清修の校舎を見渡してください。小さな学校ながら生命力を覚えます。だからだと騒々しいわけではありません。主体的なアクションの集合体。だから活気が弾んでいるのです。

■清修のフィールドは世界に至る

清修は小さな学校。でも、「こぢんまりと囲われて過ごす学校」は誤解です。今、各地の私立学校の生徒たちが長期の海外研修に挑みます。清修生たちも同様。でも、清修の海外研修は別格的に報じられています。力強いポテンシャルと先生の情熱を覚えます。他校では中3以上が一般的ですが、清修では中学2年生の夏。さらに、舞台は英国ロンドン郊外。家庭を離れた寮生活。困難を乗り越え3週間の研修を全うします。世界の留学生とも励まし合います。

英語学習の動機喚起や異文化コミュニケーションが課題。さらに価値ある成果は、生涯を導く糧となる成長体験です。生徒たちの心のなかに成長への心構えが芽生えます。そして、日本の家族への感謝の気持ちも携え帰国します。

高1生は2週間のEU研修に旅立ちます。フランスのアルザス・ロレーヌ地方を中心に、欧州の古都、ウィーンやパリも巡ります。フランス語やドイツ語圏での研修は私立学校でも類いまれ。世界を多角的に見る視野も得るでしょう。単なるヨーロッパ旅行では不本意です。日本との文化交流を目的としているNPO団体CEEJA（Centre Européen d'Etude Japonaises d'Alsace／日本学研修所）もサポートする本格的な研修です。世界の一流研究者や学生たちとの交流も、日本では得難い貴重な糧を恵みます。

■SEISHU TOPICS

若い学校ですが、日本の女子教育の名流、白梅学園の建学精神が息づきます。1942年（昭和17年）は世界戦乱の渦中。白梅学園は女子たちを迎えました。初代学園長は東京大学の法学部長も勤めた穂積重遠博士。同じく東大法学部教授で文化勲章受章者、牧野英一博士が意志を受け継ぎました。以後も各界を先導した名士たちが導いた学園。ヒューマニズムの愛と自由の理念の下で、生徒一人ひとりの才能・特徴を発見し、それを最大限伸ばす。明るく健康で、社会的な礼儀・素養も十分に身につけた気品のある人材として、また将来に大きな夢と希望を抱けるような人材として育て、世に送り出す。白梅学園の信念です。

●生徒たちが守る「清修ステイタス」

清修女子たちは身なりも整い爽やかです。学校には明文化された校則が定められていません。清修生らしい「気品」は、生徒たち自身が守ります。生徒たちは、ふさわしい「清修ステイタス」を態度で示します。

「STサイクル思考型」と名付けた授業展開。Sは生徒とTは先生。「動機付けのInput」→「議論Output」→「知的獲得のFeedback」→「発表のRe-Output」の循環サイクルを繰り返します。受け身的に講義を聴くだけでは行き止まります。お互いが対話を交わしテーマを深く耕します。問題発見・解決・発表能力を養います。日々の授業で養うのは真の知性と教養です。

昼休みと放課後の時間は、SLT＝「Self Learning Time（セルフラーニングタイム）」と名付けました。自学自習の習慣や手法を身につけるための「仕掛け」です。中学生は「スケジュールブック」を携えます。自己管理ツールです。スケジュールを組み立てるのは生徒が自身。徐々に先生の管理から離れ、高校生になれば計画と実践は当然の「習慣」として備わります。

海外研修が前後の学びと隔離しては、せっかくの体験も思い出話で終わってしまいます。海外研修も日本でのさまざまな教育手法とつながります。渡航前には、英語科や社会科をはじめ、さまざまな教科が連携します。全先生が力を合わせて好奇心と意欲を耕します。

